

最善を尽くす

2023.8.2

「最善を尽くす」という言葉がある。人は、よく「最善を尽くします」と言ったりする。では、本当に最善を尽くしているのだろうか。私は、断言する。私自身は、最善を尽くしたことはない。尽くそうとしたことはあるが、最善を尽くすというレベルに達したことはない。

例えば、試験の前の晩に夜通し勉強をする。徹夜である。努力はしているので、よいことではあるが、決して最善の努力ではない。覚悟を決めて夜も眠らないで勉強を3か月やった結果、病気になってしまったとする。これも、最善の努力ではない。

最善の努力というのは、あらゆる条件を考え、どのようにしたら最終の目的を達し得るかというような、あらゆる状況を考えることである。したがって、体の条件、その他も考えて、長くやれば体がもたないような努力は、決して最善の努力ではない。

ちょっとぐらい徹夜すると、自分ではがんばっているような気にはなる。若いときには、そんなことがあった。しかし、そんな努力で本当に素晴らしい業績や成果が上げられるかということ、おそらくできない。

命をかけた努力というのは、ある意味では、非常にゆとりをもった、それでいて、いかなる場合にも決して揺るぎのない努力である。それは、あらゆる知恵とあらゆる愚かさとを混ぜたような努力である。

最善の努力といっても、長い期間にわたるものと一時的なものがある。一時的なものは、目的もはっきりして、その多くは強制された、あるいは、やむにやまれない場合が多い。それほど積極的ではなくとも、周囲の空気に励まされて、短期的な努力ならばできるかもしれない。

問題は、長期的な努力である。これには、人間個人としての一生の目的、会社としての仕事、日本あるいは世界というような問題もある。世界のことを考えないで、日本のことは考えられない。

一時の意欲や興奮に乗ってやるようなことは、短期型の最善の努力はできても、本当に自分の一生を貫く、あるいは会社の運命をかけるというような大きな最善の努力はできないであろう。疲れるような努力の仕方は、いかに熱心であっても、まだまだ分別の足りない努力である。疲れても、その疲れが一晩眠ることによって、翌朝には回復するというような努力の型でなければならない。

振り返ると、若い頃は、短期的な努力で満足していたのかもしれない。自分はがんばっていると。40代になると、無茶なことは考えなくなった。体がもたない。少しずつ、長期的な努力について考えるようになった。とてとても最善の努力というものではないが、自分の教員人生を貫くもののようなことを考えるようになってきた。

だが、如何せんスタートが遅かった。もう少し、早く気づいていれば、我が教員人生も変わっていたことだろう。もはや、「最善を尽くします」などとは言わない。しかし、今からでもやれそうなことはある。そう思っている。